

株式会社 オデッセイコミュニケーションズ様

私はこの一年間を通して、出発前と比べて「他人を理解する」ということをより深く考えるようになりました。

10 カ月という月日は、ものすごく早かったですが、この期間に経験したことや学んだことは多岐にわたります。最初は、見るものや人があまりにも日本と違うため、アメリカに来たことを実感すると同時に、友達ができるか不安にもなりました。しかし、ホストファミリーに恵まれたので、生活にはすぐに馴染めました。

ホストファミリーは、両親と大学生の姉、同じ歳の弟の4人家族。弟とは同じ高校だったので、毎日一緒に自転車で通学しました。彼は芸術（フォトグラフィー）に興味があり、常に写真を撮っては編集していました。私は、芸術にあまり関心がなかったため、彼と話していてもわからない点も多く、日本の芸術に対する質問に答えられずに彼をがっかりさせたこともありました。しかし、最終的には彼の話や芸術への想いを理解でき、“奥深い世界なんだな”ということを知りました。さらにもう一人、家族の一員としてドイツ人の留学生も滞在していました。彼は、過去にアメリカに住んでいたこともあり、すでに車の免許も持っていました。高校ではボート部に入っていて、私も日本ではボート部に所属していたので共通の話題ですぐに打ち解けました。とにかく、ジョークが毎日のように行き交うとても愉快的な家族で、最初はわからなくて笑えなかったのですが、慣れてきた頃には自分もジョークを言うまでになっていました。また、家族との旅行も思い出深く、なかでも冬休みに行ったフロリダ最南端の島、キーウエストの印象は鮮烈で、青森県出身の私にとっては、今まで体験したことのないトロピカル（暖かい）な冬を過ごしました。その他、ホストシスターが在籍しているインディアナ大学にも連れていってもらいました。フロリダとはまったく異なる印象のインディアナ州に触れ、アメリカの広さを改めて感じました。

学校の授業では、最も大変だったのが「英語」で、本を読んでエッセイを書くというやり方に慣れるまでに時間がかかりました。しかし、妥協したくなかったため、理解できないことがあったときは、その日のうちに昼休みや放課後に先生の教室へ出向いて質問するようにしました。こうした機会に先生といろいろと話ことができ、そのような時間はとても楽しかったことが思い出されます。また、学校のクラブでは水泳部のほかに3つのクラブに入りました。しかし、これらのクラブと勉強以外に、私が留学中に最も力を注いだのは、新しいクラブの創設です。

留学先の高校は、全生徒数が約3,500人もいる大規模な学校で、私の年代だけで11人もの留学生が世界各国から来ていました。しかし、学校の規模が大きすぎて日常的に触れ合う機会がなかったため、「留学生同士、もっと盛んに交流しよう」と呼びかけ、『International Student Association』（ISA）を発足させました。これは、留学生同士の交流を活発にすると同時に、現地の生徒にも自分たちの留学プログラムを知ってもらうことを目的にしました。このクラブを本

格的に立ち上げたのが、留学してから約5カ月が経過してからだったので、当初計画していたボランティア活動等を実施できなかったのは心残りですが、私の立ち上げたISAは、来年も引き継がれることが決定！ 自分の創った組織を次の世代に残すことができとても嬉しく思います。

最初の頃は、異文化交流が「楽しい」だけのものだと思っていました。しかし10カ月という長期的なスパンになると、楽しいことだけではありません。ときどき、自分の国や文化について批判されたり、からかわれたりすることがありました。最初は感情的な受け答えをしていましたが、次第に「自分がどのように対応すれば、相手に理解してもらえるのか」ということを考えるようになりました。異文化理解とは、「相手の文化を理解して、その国の背景や知識も踏まえて相手を受け入れる」ということ、そして相手を理解する積極的な姿勢が大事だと学びました。また、私の留学中、日本では「内向き思考」という言葉が世間で取り沙汰されていたと聞きました。高校留学の醍醐味とは、感受性が豊かで何でも受け入れることができる時期に交流することで、その国の現状を体験できることだと思います。“国の代表”という責任感を持ち、留学先で異文化を体験し相互理解を深める。そういうことが、我々留学生の役目であり、これはAFSの理念そのものですが、私は留学していた10カ月でようやくその役目が果たせたように思っています。

今回の留学を通じて世界中に友達ができたので、いつか友達の家をすべて訪れてみたいと思っています。将来は、これらの経験を活かし、世界銀行に就職して貧困撲滅を農業・地方活性の面から支援していきたいです。

最後に、AFS およびオデッセイ コミュニケーションズ様に、改めて深く感謝申し上げます。

阿部大亮（2010年8月）